

# ああ、相談業務

## ～沙那さんの話～

3

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

### 沙那さん家族

筆者が関わり始めたとき、沙那さんは小学校6年生。父親58歳、母親40歳、姉17歳高校2年生、兄14歳中学2年生、弟小学校3年生、妹4歳、弟2歳、父方祖母72歳の9人家族。そして猫が数匹。家は2DKの平屋。貸家である。内風呂は無い。父親はとび職。母親は無職。

### 相談が始まる

沙那さん（以下本児）に関わることになった

最初のきっかけは、本児ではなかった。当時、本児は不登校だったが、それよりも、妹の三歳児健診と弟の一歳半児健診が未受診だったことが問題で、学校からの不登校相談ではなく、保健師さんからの相談が発端だった。

子どもがたくさんいることから、何とか上の子の様子など情報を集めるうちに、不登校傾向などの様子がわかってきた。あの子もこの子もということで、学校から情報を貰うと、特に本児はずっと来ていないという。また上の兄も中学から不登校であるとの情報があった。姉は通信制高校に通っていた。

また、学校からの情報で、本児は学校に来て一言もしゃべらず、勉強は中の下くらいだとこの事であった。但しそれも一年ほど前の話である。

## 経過

はてさて、どこから手を付けるか？そもそも、3歳児健診と1歳半健診を受けていない下の二人の子についての相談である。先ずはそこから考えた。今であれば、集団等に入っておらず、生死が長期に渡り確認できていないとすれば、現認という理由で家庭訪問が出来る。しかし、その当時はそのような制度も無かったので、1歳半健診と3歳児健診の発達検査の一部を訪問で実施するとして、保健師から一応母親にお手紙で連絡を入れてもらった。電話はあるはずなのだが料金未納なのか繋がらない状態であった。小さい子がいるので多分母親は家に居るだろう。

その家に行くにあたり、保健師から家のことを聞いた。赤ちゃん訪問の様子から、とにかく汚くてゴミ屋敷と言えとの事。ここではたと考えた。何を着て行こうか……。普段家庭訪問をする時は、相手に失礼の無いように、スカートかパンツにジャケットという服装を選ぶ。しかし汚いと聞くと、そんなにきちんとした格好で行くのもと思い、検査をするのに動きやすいからと考えて、市で支給されているジャージとパーカーを選択した。

当日は、ゴールデンウィーク前の北海道では少し肌寒い時期だが、天気も良くやや暖かい日であった。近くに公用車を止めて歩いて行くと家が近づくに従い、異様なにおいが漂ってきた。つまり家全体が均っている状態なのである。

「わー、これは大変な家だな。」と心の中で思いつつ、それでも全く意に介さない風を装いながら玄関のベルを押した。こういう家では良くあることだが、ベルが鳴らない。電池が切れているのだろう。玄関の周りは多少草が生えて

いるが、子どもの三輪車が転がっていた。玄関前で声を掛ける。「ごめん下さい。市の相談員の河岸です。」などと声を掛けたところ、何回目かで、「どうぞ」という声が返ってきた。

引き戸を開けるとカギはかかっていなかった。玄関の中に入ろうとしたら、足を入れる隙が無い！まず三和土の半分は、大きな冷凍庫がふさいでいて、その上に、いつ食べたのかわからないが焼きそばがこびりついたホットプレートが置いてある。他にも何やらあれこれ山盛り置いてある。半分残っている三和土は大きさの異なる靴が散乱している。そして、直ぐの所にトイレがあり、ドアは開けっ放しで、匂いも酷いし、汚れてもいるのが見て取れた。

血の気の薄い、細っそりした女性が、2歳くらいの子を抱っこして出迎えてくれた。この人が母親であった。母親に上がっても良いかと許可をもらい、何とか靴を置く場所を作って上がらせてもらう。上がった部屋が台所と居間で、テレビと当時でも珍しかったテレビ電話やゲーム機などが置かれ、畳のその部屋は弁当の殻や、調味料、ゴミなのか何なのかかわからないものがそこそこに散らばっていた。北海道にはゴキブリがいらないと言われているが、その家には小さなチャバネゴキブリが目についた。更に目の前にはくぼみあって、そこに石油ストーブが置かれていた。ここでストーブをつけているのかと思うと、火事になる不安も感じられた。

物を除けさせてもらって何とか座る場所を確保し、更に簡単な検査をするための場所も確保して、発達検査を実施した。二人とも身体面は問題ないようだった。やり取りなどで知的にはボーダーかなと思われた。

全部するわけではないのですぐ終わった。子どもの確認ができれば良いのと、この家族と関わるきっかけづくりの意味合いなので、あとは母親と健康状態や子どものことなどあれこれ話す。母親は、余り了解性が高いとは言えなかったが、笑顔で答えてくれた。小学3年生の次

男と長女以外の子どもたちは別の部屋にみんなているようだった。幼い二人の子だけが行ったり来たりしていた。祖母は今父親の妹の所に行っていないとのことであった。

母親の話では、中学生の長男は、ポータブルゲームに熱中している、次女も同様に、心配はしているが言うことをきいてくれる状況でもないとのこと。「訪問を繰り返して子どもたちと関係を作りたいと思うが・・・。」と伝えると、「来てくれるならどうぞ」と言うことだったので、次の約束を取り付けておいとしました。

畳の上に座っていたのだが、脛や足の甲が、徐々に湿ってきた。何だろうと思っていたが、後で見えたら、ジャージの膝から下と、靴下にシミが出来ていた。畳が傷み腐っていたのだ。だからこそ畳の一部が落ちていて、そこにストープが鎮座していたのだ。来るときのにおいも、その家に居る間に段々麻痺して、あまり気にならなくなっていた。

それから、月に1-2回程度訪問を繰り返した。汚さやにおいは増していくばかり。夏はそれもまた強烈になる。しかし子ども達も父母も、汚いとか匂いがあるということにはまったく気づいていない。不衛生だと病気になるのかと思いきや、誰一人として最近病院にかかった経過がない。それはそれで凄いなと思った。

訪問の度に、何かしら絵本やら折り紙やら遊ぶものを持って行ったりして、下の子たちと遊びながら、本見や兄と関わりを持てる時間を作るようにした。そんな中、兄とは話が出来るようになったし、小学生の弟とも話せるようになってきた。しかし、本見だけはいつまで待っても一言も口をきくことは無かった。それでも一緒に折り紙をしたりすることはできていた。そして、七夕の時期が近付いた。子どもたちに、七夕祭りについて話していると、やったことがな

いという。だったら今度来るときに七夕飾りを作ろうという話になった。

7月初めに訪問するにあたり、笹竹を探したが、近所の花屋などでは売っていない。北海道は熊笹はあっても、竹や笹竹は生えていない。代わりになるものを作るしかなく、緑の園芸用の棒に色画用紙と針金で笹の葉を作って、笹竹らしきものを作った。沢山の色々な折り紙とハサミやノリを持って訪問した。

七夕飾りと言えば、折り紙で作るチェーンや短冊、網掛けなどがある。子どもたちは全く知らなかったので、一つ一つ教えて一緒に作った。そうした作業の中で、緘黙だった本見と関りが深められるようになった。話すことは無くてもやり取りは顔みや首振りなどでコミュニケーションが取れるようになっていった。

子どもたちと関りながら、母親や父親からも、色々な話が聴けた。家族は月1回皆で家族風呂に入りに行くこと、子どもたちはいじめが原因で学校に行かなくなったこと、父親は鳶職で先鋒という極めて危険な仕事をしていること、給料が多い時もあったが最近はかなり少なくなって生活が大変で下の子たちを幼稚園に入れたくても入れられない事など、この家族の様々な情報を得ることが出来た。こちらからは、このまま子どもたちが学校に行けないでいることで良いのか、施設に預けることを考えたことはないか、施設を活用すると、下の二人は幼稚園にも行けるだろうし、上の子たちも小さい小学校や中学校に行くので行きやすくなるかもしれないなども伝えた。父親は年齢が高く、危険な仕事で足を折ったり、怪我をしたこともあって、父母の間に子どもたちを育てていく自信が無くなっていたのもあると思うが、徐々に施設活用について気持ちが向いて行った。

こうした関り続けているうちに、母親が第7子を妊娠し、貧血が酷く、入院が必要となった。さて子どもたちを誰が見るのか。父親は仕

事をしていて、子どもたちを見ることはできない。高校生の長女には学校もあるし、アルバイトもしているので、子どもたち全員の面倒は見られない。祖母はそのころ体調も悪く、父親の妹の所にずっとお世話になっていた。他に親戚など近くにはいないという。そこでこの機会に長女を除く子どもたちを一時保護する話になった。児童相談所にお世話になるにあたり、福祉司が家庭訪問をした。その家の汚さに驚いたのもそうだが、ゴキブリがたくさんいる家から子どもたちを預かるということで、一時保護所は大騒ぎになった。

翌日、公用車に子どもたちを乗せて連れて行くとしたときに、母親が毛布を一枚持ってきた。「この毛布がないと下の子たちが落ち着かないから」というのである。余計なものを持っていけばそれだけゴキブリやその卵を持っていくことになってしまうが、無下に断れない。トランクに入れて、保護所へと向かった。子どもたちは母親と別れても、泣くでもなく騒ぐでもなく、皆大人しく車に乗っていた。三女の世話は本児が見ていた。当時はチャイルドシートの義務付けもなく、大きい子が小さい子を抱っこして車に乗っていた。保護所につくと、指導員の人たちが子どもたちの服を全部脱がせてお風呂に入れ、服は全て洗濯し、くだんの毛布は外で確認してから洗濯して干したそうだ。

一時保護中に子どもたちの発達検査と医者の診断を受けることも両親に了解を貰って行うことが出来た。その結果、身体面の健康状態は良かったが、精神面では中学生の長男は知的障害、3年生の妹は知的にボーダー、下二人の子もボーダーで本児は知的には問題ないが場面緘黙と診断された。そして、そのまま子どもたちは施設入所となった。子どもたちは、こうして衛生的な施設で、匂いも無い、片付いた部屋での生活を続けて行った。

母親はその後無事に第7子を出産。母親と

父親には時々会って話を聴いていた。その中で、もう子どもを作るのは母親自身の体の問題もあるからと家族計画の話をしていった。子どもたちは夏冬の長期の休みに帰省をしていた。途中で、別の風呂付の平屋に移ったが、1か月で風呂場がゴミ置き場に代わっていた。子どもたちが片付けるかと思ったら、そういう様子は見られず、住み慣れた家の匂いに落ち着き、くつろいでいた。

その後数年にわたり、子どもたちの様子を聴かせてもらっていた。長女はそのまま家に残り、学校卒業後、しばらく働いたのち結婚して出て行った。長男はその後高等養護学校に進学、本児は普通学級の中学校に進学して、元気に過ごした。口数は少ないものの、小さな中学校で少しずつ話せるようになって勉強も本児が一番知的に高かったこともあり、問題なく、自信をつけていったそうだ。次男は小学校にきちんと通い、三女は幼稚園に入園、三男もその後幼稚園に入園して元気に過ごしていった。お正月や夏休みの帰省の際には、両親と楽しい時間を過ごしているとのことだった。両親は子どもたちを幼稚園に通わせてもらったことや、学校で適応的に過ごせたことにととても感謝していた。

## まとめ

このケースでは父母の能力の問題と、経済的にも大変な状況だったこともあって、話はスムーズに進めることが出来た。しかし、このケースで学んだことは、不衛生な家で育っても、施設等で衛生的な環境にいれば、衛生的な生活が良いと思うだろうという想定が覆されたことだ。このケースの子どもたちは、匂いや知的な問題から学校でいじめられたこともあり、不登校になって行った。父母は能力的には低くても、

子どもたちを可愛がっていて、衛生面を維持することは出来なくても、親子関係は良く、優しい、穏やかな子どもたちに育っていた。それはそれでよかったと思うのだが、衛生面に気をつけられる子にはならなかったのである。

不衛生な家で育っている子は全般的に病気に強い。鼻は垂らしても大きな病気にならないのである。不衛生だから雑菌に強いのかも知れない。大きな冷凍庫には夏の間採りためた山菜の塩漬けが沢山入っていた。父親はこうした形で家族の食料を補填していた。世の中が衛生的になり、子どもたちは清潔な衣服をまとい、毎日風呂に入るようになった。その結果、月に1回しか風呂に入っていないこのようなケースの子どもたちは、匂いがきついと言われ、先生方からも保護者が注意を受ける。母親が洗濯をしたとしても、部屋そのものに匂いがある以上、衣服に匂いは染みつく。前回の話でも時代の話をしたが、このケースも時代を感じるケースであった。戦中や戦後のまだ豊かになる前の日本であれば、このケースが問題となることは無かっただろう。

最近でも、小学校や中学校で時折においがき

つい子や衣服が薄汚れている子がいて、先生から相談されることがある。子どもたちが嫌がるし、いじめの原因になるからと。確かにそうだろう。しかし、そういう子を受け入れられる土壌を学校にも作らないといけないのではと思う。自分たちの持っている枠組み、考え方が正しいと思ってしまえば、他の生き方考え方を受け入れることは難しくなる。もっと大きな枠組みで、他の人を受け入れられるようになることが必要であろう。

小さい時から慣れ親しんだ生活は、それが良いか悪いかではなく、それ以外の生活には中々馴染めない。我々支援者はもっと良い生活に子どもたちを入れてあげたいと思う。その方が子どもたちも幸せなはずと。しかし本ケースの様に、それが必ずしも幸せではないこともある。教育を受けられ、将来的にプラスになるような生活を出来たことは良かったと思うが、そういう支援者の思いと子どもたちの思いのずれをしっかりと考慮しないとイケない。何が良くて何が悪いのか、その子の立場、目、気持ちで考えられる支援者でありたいと思ったケースであった。